



岩手県県北家畜保健衛生所  
岩手県北家畜衛生協議会

### 目次

豚のサルモネラ症とその対策	1
初乳の重要性について	3
新体制紹介	4

## 豚のサルモネラ症とその対策



豚のサルモネラ症は、サルモネラ属菌の感染で起こります。本菌は2,000に及ぶ血清型があり、いくつかの型は届出伝染病に指定され、毎年、数百頭の発生が報告されています。

本症は主に2～4ヵ月齢の豚に好発し、発熱、下痢、脱水、敗血症や発育遅延などがみられますが、回復しても間欠的に菌を排泄し続ける場合があります。サルモネラ菌は低温や乾燥に強く環境中でも長く生存しますが、多くの消毒薬で死滅します。

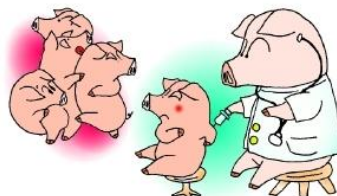
また、本症は人畜共通伝染病の一つであり、豚から排泄された菌が食肉や環境汚染の原因となることがあり、食中毒を防ぐために生産段階でも衛生管理を意識して取り組むことが大切です。

表 最近5年間のサルモネラ症の発生状況

発生数	平成26年	25年	24年	23年	22年
豚（全国：届出伝染病）	430頭	301頭	599頭	469頭	927頭
人の食中毒(全国)	440名	861名	670名	3,068名	2,476名

出典：農林水産省、厚生労働省ホームページ

サルモネラ症の対策は、農場への原因菌の侵入を防ぐことと農場内での伝播を断ち切ることを意識しましょう。



次頁に続く

## 【農場への原因菌の侵入を防ぐこと】

サルモネラ菌が農場に侵入する経路には、車両、人、物や野生動物を介するものと、保菌した導入豚が持ち込む場合もあります。農場に衛生管理区域を設定し、区域を出入する車両や立入者の消毒を実施し、立入者は、出入り口で専用の長靴や作業服に交換すること、他農場で使用した器具・機材は消毒してから持ち込むことが重要です。野生動物からの侵入を防ぐために、豚舎の金網などを点検補修し、ネズミを定期的に駆除しましょう。豚を介した菌の侵入を防ぐためには、信頼のおける導入元から健康な豚を導入し、一定期間隔離して健康を観察しましょう。農場への立入者、毎日の作業内容や家畜の健康状態も記録しておきましょう。



## 【農場内での伝播を断ち切ること】

万が一サルモネラ菌が侵入した場合、豚同士や豚群で相互に接触があれば、感染は農場全体に広がってしまいます。母豚や未経産豚は回復後も保菌する場合があります一方、離乳前の子豚の感染率は低いとされています。感染率の低い子豚を成長させ、サルモネラ菌との接触が無ければ、農場の感染率は最小限で経過させることができると期待されます。**群の間の感染を断ち切るために、オールインオールアウトを徹底しましょう。連続飼養の豚舎においても、通路を清掃・消毒し、器具・機材の連続使用を避けるとともに、空舎期間を十分に設け、菌が残存する豚房に新たな群を移動することがないように注意することが大切です。**豚の動線を一方向にすることや、管理を若い豚から始めることも意識しましょう。

## 【病気のサインを見逃さずに早期に対応】

下痢などの流行がみられた際は、サルモネラ症を始めとした様々な家畜伝染病の可能性が考えられます。獣医師に相談して早期に対応しましょう。また、農場の感染リスクを把握するため獣医師と相談して定期的にモニタリング検査を受けることも有用です。

## 【出荷にあたって】

と畜場へのお荷前には、餌切り及び豚の健康観察を行い、糞便を落として豚体をきれいにするなど、お荷時のルールを守りましょう。〈中小家畜〉

参考資料 Code of Practice for the Prevention and Control of Salmonella on Pig Farms





## 初乳の重要性について

初乳中には病気から体を守る特別な物質（免疫物質）や栄養が豊富に含まれています。新生子は感染に全く抵抗力の無い状態で生まれてくるため、初乳を適切に与えることが重要です。

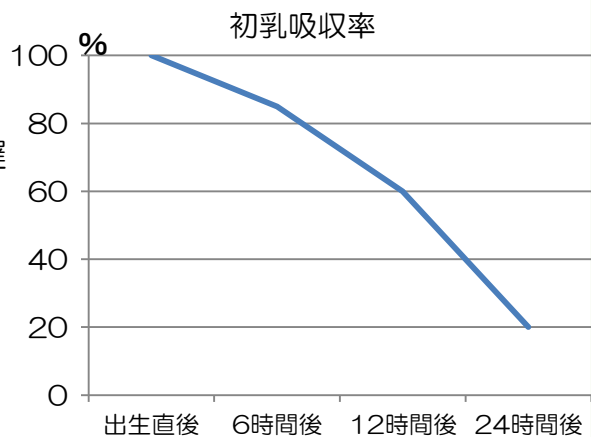
### 1 初乳は子牛にとって大切な成分が多い

- ・ビタミンA、D、E ・免疫グロブリン ・抗菌性物質 ・成長因子
- ・吸収を促進する酵素 ・タンパク質 ・脂肪 ・ミネラル ・糖質 など

### 2 初乳の吸収

新生子の腸では出生直後から免疫物質が吸収され始め、そのピークは生後6時間です。24時間を過ぎると吸収は急激に低下し、初乳給与が遅れると、全身の抵抗力が落ちます。

一方、腸自体の免疫にも有効で、体に吸収されなかった免疫物質は腸の粘膜にとどまり、下痢などの病気を防いでいます。十分な期間、初乳を与え続けることも大切です。

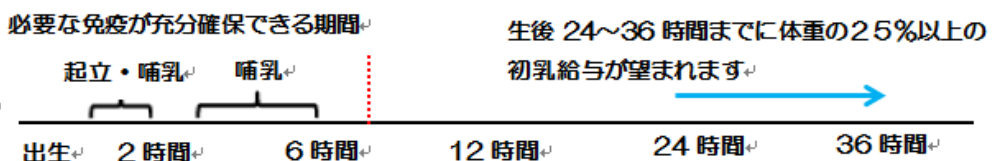


### 3 初乳給与のタイミング

新生子が哺乳欲を示すタイミングで初乳を与えることが推奨されます。出生直後の子牛は胃の中に羊水が残っています。出生直後の初乳の強制給与は、初乳が羊水と混合・希釈され、免疫物質の吸収が低下します。羊水が胃から腸管に移送されると子牛は哺乳欲を示します。

### 4 初乳給与量

1回目は2時間以内に0.5~1.0ℓ、2回目は6時間以内に0.5~1.0ℓが標準量とされています。ただし、免疫や栄養が不足しないよう、子牛が満足する量を飲ませることが重要であり、自力で哺乳するのであれば、4~5ℓ飲ませることも可能です。



次頁に続く

## 5 初乳製剤

初産牛や泌乳量の少ない母牛の場合、免疫物質を含む初乳製剤の追加投与により、免疫と栄養が不足しないようにしましょう。

## 6 最後に

- 新生子の行動をよく観察することが大事です。
  - 初乳製剤は使用方法に従って正しく使いましょう。
  - 母乳では喉の渇きは癒されないので、常に水が飲めるように用意しましょう。
  - 強制給与は誤嚥や飲ませすぎによる逆流などの事故につながるため、十分注意しましょう。
- 〈大家畜〉



## 職員紹介



岩手県県北家畜保健衛生所  
主任獣医師

おさない こういち  
長内 幸一



今年の3月に、35年間勤務した岩手県職員を定年退職し、7月1日より岩手県再任用常勤職員として県北家畜保健衛生所に採用された長内幸一と申します。現役時代は、二戸、久慈、花巻、盛岡、宮古の旧家畜保健衛生所に14年間勤務し、その後、行政職16年、研究職5年と多方面で仕事をさせていただきました。二戸、久慈家保時代には、大中小動物の防疫業務と、牛の乳房炎、放牧衛生対策などの衛生技術指導も行いました。また、昭和62年から、県の受精卵移植技術利用促進事業が始まり、花巻と盛岡家保で技術面、県庁畜産課では行政面を担当し、県職員勤務中の大きな比重を占めた業務となりました。

現在の家保業務は、平成13年に国内でBSEが発生したことを契機に大きく変貌し、さらに口蹄疫、鶏インフルエンザなどの発生も続いたことから、これらの疾病対策を中心にした予防業務が中心となり、確実な診断のための知識と技術が求められていると思います。このような時期に、再任用職員として家保業務に従事することは、能力的、肉体的に大いに不安はありますが、家畜伝染病予防法の基、自分に出来る範囲で頑張りたいと思いますのでご指導ご鞭撻の程、宜しく申し上げます。

《発行元・問い合わせ先》

岩手県県北家畜保健衛生所

電話：0195(49)3006

岩手県北家畜衛生協議会

FAX：0195(49)3008

電話：0195(49)3040